

青梅市文化財ニュース

第 2 4 0 号

平成 1 9 年 1 0 月 1 5 日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859）

恵 比 寿 講

古い家には伊勢神宮や氏神様をお祀りする神棚の他に、荒神様（火の神様）や恵比寿・大黒様がお祀りされています。恵比寿様という^{こうじんさま}と、狩衣に風折烏帽子をかぶり、右手に釣り竿、左脇に鯛を抱え、エビス顔と言われる笑顔の姿で知られています。七福神の一神でもあり、大黒頭巾をかぶり、小槌を持ち、大きな袋を担いで、米俵に乗った大黒様と一緒に、福德をもたらす神とされています。

10 月 20 日は恵比寿講といって、その恵比寿様のお祭りが行われます。恵比寿講は主に恵比寿様を祀る家々で行われるもので、地域により違いがあります。関東では 1 月・10 月・11 月の 20 日に行うところが多く、関西方面では十日戎^{とおかえびす}といって 1 月 10 日に行われています。

恵比寿とは恵比須・戎・夷・蛭子とも表記され、異郷の人・辺境の人を意味する、エミシ・エビスに由来するといわれ、本来海からの幸をもたらす神とされていました。古事記ではイザナギ・イザナミの神が最初に産んだ神様（ヒルコ）で、からだが弱く葦船に乗せられ流されました。兵庫県・西宮神社の御祭神は、海より流れ着いたヒルコ（蛭子）を祀ったとされています。多くの地域で海より流れ着いた鮫・鯨・海豚などを「エビス」と呼び、豊漁をもたらす神として崇める信仰がありました。その神が、中世になると市の守護神の一つとなり商人に信仰され、また農民には田の神として信仰されるようになり、やがて全国に広まっています。

日本人の民俗信仰は、様々な神仏が融合していき、その御利益も様々な変化します。

^{おおくにぬしのみこと}

大国主命はスサノオの御子で、出雲大社に祀られ大黒様と同一神とされています。

^{ことしろぬしのみこと}

その御子の事代主命は同じ島根県的美保神社に祀られ、全国の「えびすさま」の総本社になっています。事代主命は夷三郎^{えびすさぶろう}と称され、美保崎でよく釣りをしたことから、今の恵比寿様の姿が生まれたといわれています。古事記とは異なりますが、そこから事代主と恵比寿が同一神とされたようです。大黒様は農業の神、恵比寿様は漁業・商

（裏面に続く）

業の神で、この親子を合わせて祀るようになっていきます。

10月の恵比寿講は、作物の豊穰を感謝する祭りとも、神無月^{かなづき}で出雲の国に他の神様が
行かれた留守をあずかる恵比寿様のお祭りともいわれ、1月は年の初めに商売繁盛
などを願う祭りとされています。いずれにしても、漁業・商業・農業の繁栄を願う信
仰が庶民の間に広がり、家の福德の神として信仰されたようです。

御岳山地区では、1月と10月の20日に恵比須講が行われます。これは神社の祭儀
ではなく、各家々で行うものです。普段神棚に祀られる恵比寿・大黒様を内神殿^{ないしんでん}（御
師の家の神殿）の前や床の間に移し、朝夕にお食事を供えます。その内容は家々で多
少異なりますが、尾頭付きの鯛に小豆ご飯、煮物、うどんなどで、足つきの膳に載せ、
恵比寿・大黒様それぞれにお供えします。家長が朝夕お膳をお供えして拝礼し、家族は
家長に合わせて拝礼します。恵比須講は御岳山地区では、これだけの行事ですが、代々
守られてきた習わしです。

参考：民俗学研究所『民俗学辞典』東京堂出版 1985

西宮神社由緒

美保神社由緒

（文責 須崎 直洋）